「ロンドンの空に美しい日の丸を揚げよう!

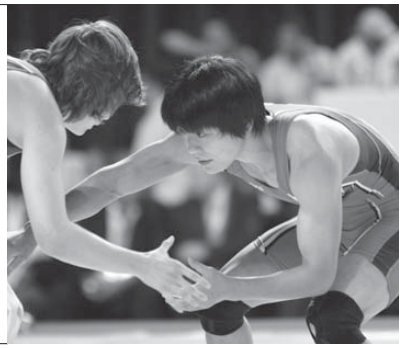
選手紹介

いよいよ7月27日にロンドンオリンピックが開催される。26競技に約350人を数える日本は米国、中国、独、仏や開催国の英国などと共に大選手団を送ることになる。前回北京大会の金メダルの9個、銀6個、銅10個を超えられるか!
日本のみならず開催国イギリスはもちろん世界中が熱いあついオリンピックイヤーを迎えてボルテージは頂点まで上がりきったようにみられる。
毎回オリンピックで大活躍している自衛隊出身選手、今回は北京の2倍の13人が選ばれた。自衛隊体育学校に所属する選手（予備自の小西選手は埼玉地本所属）は長期の厳しい練習に耐えてきたエリートばかりだ。過去には多くの選手を輩出した自衛隊、国民の自衛隊選手にかける期待はことさら大きくなっている。出身地や母校では郷土の誇りとして知事や首長、国会議員らも出席し盛大な壮行会も催された選手もいるようだ、さらに小学校のときにタイムカプセルに「オリンピックに行く」と書いた選手もおりそれぞれの気合いが強く伝わってくる。自衛隊選手１３人（予備自の小西ゆかり選手も含みます）のプロフィールを紹介します。（順不同）

小原日登美

レスリング・女子48kg級
1981年1月4日生まれ
青森県出身
2005年4月1日入隊
1等陸尉

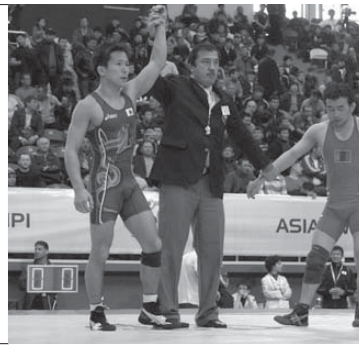
かつて51kg級で6度世界一に輝いたがオリンピックにこの階級がないため、2008年の世界選手権を機に一度は引退。
妹真紀子の引退に伴い、妹の階級48kg級でオリンピックを目指すべくカムバック。
2010年2011年と連続して世界選手権を連覇し、この階級世界ナンバー1であることを証明し、いよいよ夢のオリンピックへ。目標は金メダル。
昨年結婚し、プライベートも盤石、小原に死角はない。



湯元進一

レスリング・フリー55kg級
1984年12月4日生まれ
和歌山県出身
2007年4月1日入隊
2等陸尉

双子の兄の健一が北京五輪で銅メダルを獲得し、ロンドンオリンピックは兄弟でメダル獲得を狙う。実力は自衛隊入隊後着実にアップし、2010年のアジア選手権、ゴールデングランプリファイナルで優勝するなど、世界のトップ選手と言っても過言ではない。特にこの55kg級では見られないパワー溢れるファイトスタイルは、湯元の天性のレスリングセンスとマッチして大きな魅力となる。
日本レスリングがメダルを取り続けて来たこの階級で、湯元はさらに栄光の歴史を刻むだろう。



藤村義

レスリング・グレコ66kg級
1982年3月28日生まれ
山口県出身
2005年4月12日入隊
2等陸曹

自衛隊入隊後、人並み外れた練習量でひたむきに努力したことが結実。2010年アジア大会では銅メダル。だが、その練習量は慢性的に怪我を呼び込むことになった。だが、負傷を背負っていても、ここ一番という重大な試合で常に勝つことができたのは偉大な先輩飯室雅規1尉との練習で築き上げたディフェンス力のお陰と言える。
エリートが多いレスリング選手の中で苦労で築き上げた雑草魂はメダルを呼び込むことができるだろう。藤村にはその実力がある。

須佐勝明

ボクシング・フライ級
1984年9月13日生まれ
福島県出身
2007年4月1日入隊
3等陸尉

アジア大会連続銅メダルを獲得するなど、日本アマチュアボクシング界の第一人者。プロの世界王者クラスと比べても引けをとらないテクニックとセンスを持ち、そのクレバーなファイトスタイルは多くのものを引きつける魅力がある。だが、課題は減量に伴うコンディションづくり。自衛隊体育学校のスタッフによる完全なサポート態勢で克服したい。
日本ボクシング発展のためにも須佐にはメダルが期待される。須佐の活躍が今後の日本ボクシング界を大きく変えることになるだろう。

鈴木康弘

ボクシング・ウエルター級
1987年11月25日生まれ
北海道出身
2010年4月入隊
3等陸尉

自衛隊体育学校入校を機にウェルター級に階級変更を行い才能が開花。今年の世界選手権では3回戦で敗退したが、鈴木に勝ったカザフスタン選手が準優勝し、規定により10位となり、オリンピック出場権を獲得。ロンドンオリンピック日本代表が内定した。鈴木は海外の強豪選手に引けを取らないハードパンチと長身を生かしたアウトからのボクシングに強みを持つが、インの戦いでも決して臆する事なく立ち向かえる。大学時代タイトルを一つもとらなかった選手が体育学校で大きく変身した。

谷島　緑

ライフル射撃
1979年4月17日生まれ
茨城県出身
1999年4月入隊
2等陸曹

高校時代にライフル射撃を始めた谷島は、高校卒業とともに自衛隊に入隊。2003年に全日本選手権で3姿勢、伏射で初優勝。その後、低迷したが、着実に実力を高め、射撃界では伏射で頭角を表し、「伏射の谷島」と呼ばれる。だが、近年、他の姿勢も向上。2010年のアジア大会では3姿勢で5位入賞を果たし、日本のトップ選手として実力を開花。そして2012年アジア選手権で見事逆転優勝、入隊13年目にして悲願のオリンピック出場権を獲得した。精神的に成長した谷島の射撃に期待したい。

小西ゆかり

ピストル射撃
1979年1月11日生まれ
北海道出身
2010年予備自採用
予備2等陸曹
（1997年入隊　2009年退官）

オリンピック代表１３人確定の意義

6月7～10日の間、大阪市長居陸上競技場で第96回日本陸上選手権競技大会が開催された。この大会はロンドンオリンピック代表選考会を兼ねる大会で、この大会で派遣標準記録を突破し優勝した選手がオリンピック出場内定を勝ち取るというものだった。自衛隊体育学校の陸上競技では東京オリンピックの円谷幸吉選手以来46年ぶりの代表となる山﨑勇喜2等陸曹が既に競歩50㎞で代表となっていたが、中・長距離競技でも代表を出すべく試合に臨んだ。結果は800m走で堤大樹2等陸曹が5位、長距離のエース室塚健太3等陸曹が28位という厳しい結果に終わった。

この日本陸上選手権が自衛隊体育学校のロンドンオリンピックへの挑戦がかかった最後の大会であった。この結果、自衛隊体育学校からのロンドンオリンピック代表選手の数は12人に確定した。自衛隊としてみると小西ゆかり予備2曹（現所属：飛鳥交通株式会社）を含め13人となり、現時点で、日本選手団の中で所属先としては自衛隊が最大の規模となる。これはスポーツ界にとってはエポックメーキング的な出来事であり、各メディアでも大きく報じられることになった。何故、自衛隊で多くのオリンピック代表を輩出できたか、　そこには一般アスリートにはない自衛官アスリートというキーワードがあった。　自衛官アスリートとは「事に臨んでは危険を顧みず、国家、国民の安全のために奉職する」ということを前提に、世界の頂点に挑戦することにより得られる強靭な体づくり・心得・技術等を通じ、精強な部隊を作り上げるためのノウハウを部隊に還元すべく、オリンピック等の国際試合で活躍することを任務とした選手たちだ。その彼らに一つの転機が訪れる。2011年3月に起きた東日本大震災だ。そこでは、多くの自衛官が災害復興活動に従事し、国の一大事に寝食を忘れ全力を尽くした。その派遣期間中、自衛隊体育学校の選手たちは、一部の学校職員を除き、災害現場に派遣されることなく競技に専念することを任務とされた。この時、全ての体育学校所属選手たちが、自衛官として競技を行うことの重さを自覚し、自己のアイデンティティを見つめ直すことになった。自衛官アスリートはこの災害を通して、自分たちが何をなすべきなのかを再確認し、自分たちの同僚である自衛官、さらに国家、国民へ感謝しつつ自分の任務である日々の訓練に今まで以上に邁進した。彼らの奮起こそが、その後のオリンピック出場権をかけた様々な戦いで発揮され、合計13名のオリンピック代表を誕生させた。この勢いはオリンピックでも発揮されるに違いない。